

## 青柳文庫の特徴と機能 - 養賢堂文庫と比較して -

小林 真理絵

明治以前、仙台には私人蔵書以外に5つの文庫があったと言われている。藩主の書庫、藩校養賢堂の文庫、大崎八幡宮別当龍宝寺にあった法宝蔵文庫、塩釜名山蔵文庫、青柳文庫である。本研究では、この中の青柳文庫についてとりあげる。青柳文庫は、青柳文蔵が仙台藩に寄贈した蔵書2万巻からなる文庫である。仙台藩の藩校である養賢堂の分校医学校の西隅におかれ、書記典籍を兼ねた医学校の補助によって管理されていた。

日本の図書館史は明治を境に分断されている。しかし、明治以前にも現代の図書館の機能と共通するものがある文庫が存在した。日本近代の図書館の制度が統一されてくるのは1899年の図書館令以降であるが、図書館の主たる機能である公開・閲覧・貸し出しは、図書館令以前の書籍館時代、さらに書籍館以前からも行われてきたことである。分断された図書館史を捉えなおすために、明治以前の文庫の機能に着目する。本研究では仙台藩の青柳文庫の実態と機能に再検討を加え、青柳文庫から宮城書籍館へどのように図書館としての機能が継承されたのかを明らかにする。

本研究の主な先行研究は高橋章則氏の「青柳文庫の蔵書構成」、早坂信子氏の「青柳文庫のゆくえ」があげられる。これらの研究により青柳文庫が建てられる前、廃止後の様子について明らかにされたが、資料的制約のため青柳文庫の実態へと踏み込んだ研究はなされていない。そこで本研究では文献調査と蔵書分析の2つの手法を用い推察を行った。文献調査では宮城県図書館、仙台市民図書館、仙台市博物館、宮城県公文書館に所蔵されている青柳文庫、養賢堂、宮城書籍館の資料を収集した。青柳文庫そのものに関する資料は発見できなかったため、より広い観点から資料を探した。蔵書分析では青柳文庫蔵書と養賢堂文庫蔵書にNDCを付与し、両者の比較を行い、さらに青柳文庫に関しては現代の公共図書館とも比較した。分析にあたってNDCを用いたのは現代の公共図書館との共通性をはかるためである。

文献調査により青柳文庫を管理していたのは目付ではなく医学校の補助であったことが明らかになった。また蔵書分析により青柳文庫が現代の公共図書館に近い多様な分野の書物を所蔵していることが明らかになった。

宮城県の場合は書籍館が青柳文庫の在り方にならい貸し出しサービスを行っていた。さらに全国的に財政難のため書籍館が廃館に追い込まれたなかで唯一宮城書籍館だけが生き残ることができたのは、青柳文庫により書籍館の存在意義が仙台藩の人々に根付いていたことによるものであると考えられる。つまり青柳文庫が宮城書籍館の在り方に影響を及ぼしていたと言える。そのことを考えると図書館史を単純に時代区分で分けるのではなく、江戸時代の文庫からの流れも考慮した上で検討することが求められる。

(指導教員 白井哲哉)